「協働し、変わり続ける子ども」の育成
～情報活用能力を軸としたカリキュラム・マネジメントを通して～

熊本市立城東小学校

要　約

本研究は、国語科と総合的な学習の時間や生活科を、情報活用能力を軸としてつなぐことを通して「協働し、変わり続ける子ども」の育成を目指したものである。総合的な学習の時間と生活科のゴールの姿を具体的にイメージし、その姿を実現するために必要な情報活用能力を整理した。その力を、国語科のどの単元で学ぶのかを整理し、総合的な学習の時間や生活科で活用するための授業実践を行った。その結果、総合的な学習の時間や生活科の授業が変わり、国語科の授業も変わった。このような授業を積み上げていくことで、私たちの目指す「協働し、変わり続ける」子どもの育成につながることが明らかになった。

〈キーワード〉　カリキュラム・マネジメント　情報活用能力　授業改善　共有

1　主題設定の理由

これからの子どもたちが生きる未来は、ＡＩの進化、情報化された社会、少子高齢化等により、予測困難な時代であると言われている。そんな未来を生きる子どもたちに求められている力を、本校では「協働し、変わり続ける力」と考え、下記のように捉えた。

「協働」　　→他者と共に考え、話し合うことで、互いが納得解を見つけること。
「変わり続ける」→自分の知識や経験を自覚した上で活用したり、他者の考えを受け入れたりして、新しい自分の目標や考えを持つこと。

本校児童の姿はどうであろうか。校訓「まごころをつくすこども」にある通り、素直で明るく優しい子どもたちが育ってきている。その反面、現状に満足し「本当にこれでよいのだろうか。」「もっとできる。」と、更に向上しようという姿がなかなか見られないという課題もある。「協働し、変わり続ける力」を子どもたちに育成することが、本校の児童を育て、予測困難な未来を生きることにつながると言えるだろう。

では、「協働し、変わり続ける子ども」をどのように育成するとよいのか。本校の強みは、長年教育・研究を支えてきた「健康教育」である。その中心である総合的な学習の時間「けんこうタイム」の学びを他教科と関連付けることで、「協働し、変わり続ける子ども」を育成することができるのではないかと考えた。そこで、学習指導要領に「各教科等の学習の基盤となる資質・能力」として示されている「情報活用能力」を軸としたカリキュラム・マネジメントを通して、「協働し、変わり続ける子ども」の育成を目指すこととした。

学習指導要領には、カリキュラム・マネジメントの具体的なポイントとして「必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと」が指摘されている。しかし、小学校では、全ての教科を担任が一人で請け負っているからか、縦の系統に関する意識が弱い。そのため、教科横断的な視点から単元を構想しても、それが組織的な実践、学校全体の積み上げにつながりにくい。

そこで、昨年度までの研究の１、２年次において、国語科に焦点を当て情報活用能力に関わる単元の縦の系統を明らかにした。系統図を作成することで、全職員で縦のつながりを明確に意識することができた。さらに、研究授業（授業研究会）ごとに、各学年の担任が、１分程度で同系統の単元のねらいや学習内容について説明する等、縦の系統を意識する場を設けたことで、具体的に系統を意識し、日々の実践に取り組む姿が見られるようになってきた。

そこで、本年度は、情報活用能力を軸として国語科と総合的な学習の時間（健康教育）を関連付け、学びをどう生かしていくのかについて研究を進めていく。さらに、次年度は、全ての教科等において情報活用能力を軸とした関連を図り、教科横断的な視点からの単元を開発したり、学びを生かしたりすることを目指していきたい。

2　研究の仮説

今までの研究の成果と課題を踏まえ、研究の仮説を以下のように設定した。

【仮説】情報活用能力を軸としたカリキュラム・マネジメントに取り組むことで、「協働し、変わり続ける」子どもを育成することができるであろう。

３　研究の視点

上記の仮説を検証するために、以下の視点で研究を進める。

【視点１】国語科と総合的な学習の時間、生活科をつなぐ情報活用能力の明確化
【視点２】国語科で学んだ情報活用能力を総合的な学習、生活科で生かす授業づくり

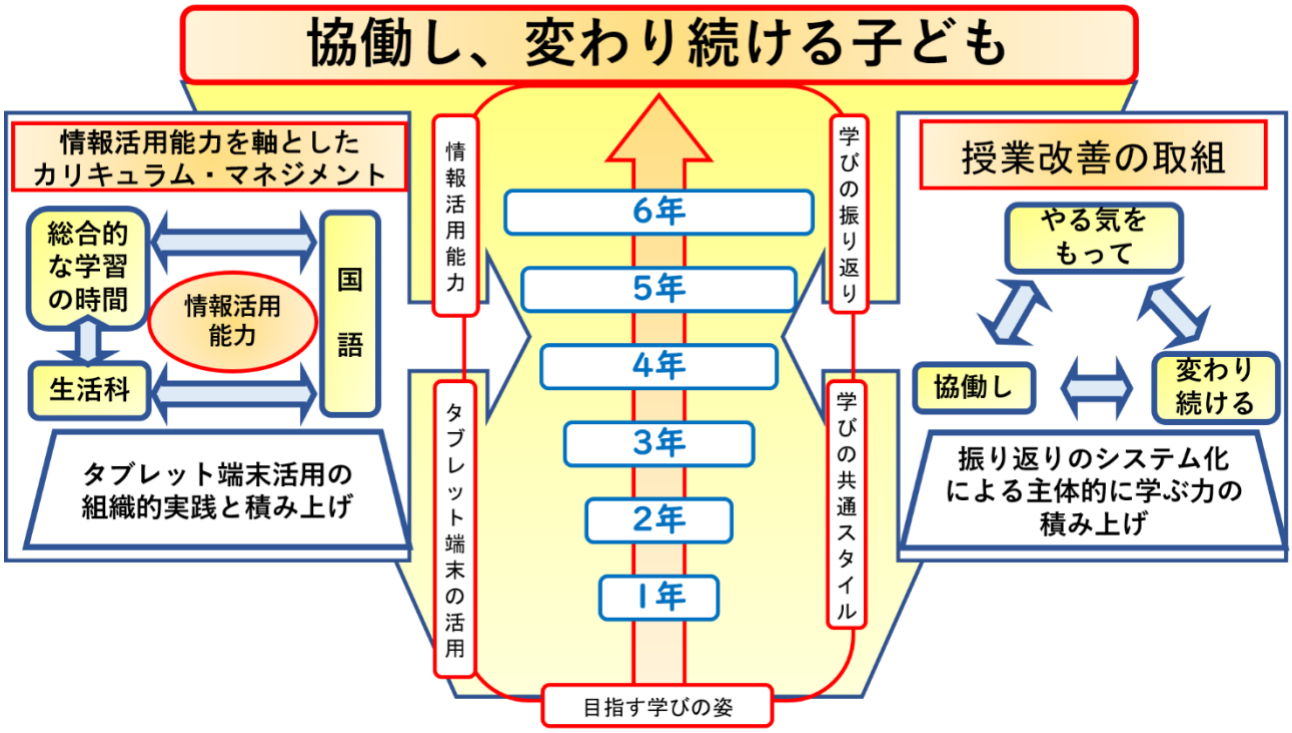
カリキュラム・マネジメントとは、全教科を横断的に見て、そのつながりを明らかにすることだと捉えられていることが多い。確かにそのことは重要だが、つながりが多岐にわたり、どこから、どう進めればよいのか具現化が難しい。そのため、つながりを明らかにしただけで終わってしまう場合もあるのではないだろうか。

そこで、本校では、まず国語科と総合的な学習の時間、国語科と生活科のカリキュラム・マネジメントを情報活用能力を軸として行う。つまり、当該学年の国語科で学ぶ情報活用能力を、総合的な学習の時間や生活科で、どう生かすのかを明確にし、実践化を図るのである。そうすることで、国語科での学びが総合的な学習の時間や生活科の授業の中で生かされ、児童に確かな力が積み上げられるだろう。

このように学んだことを生かすという視点に立てば、国語科の授業をどうすべきか、総合的な学習の時間や生活科にどうつなぐべきか等、授業が変わる。児童が、学びを生かすことができる、学びを生かそうとする授業へと改善される。それは、まさに「やる気をもって、協働し、変わり続ける」授業である。私たちは、児童に確かな力を積み上げるため、「協働し、変わり続ける」児童が育つ授業へと改善するために、上記の視点で研究を進める。

４　研究の構想図

本校の研究の構想図を以下に示す。



【図１　研究構想図】

まず、前述したように、国語科と総合的な学習の時間、生活科の学習を情報活用能力を軸として関連付け、カリキュラム・マネジメントを行う。

また同時に、振り返りのシステム化による主体的に学ぶ力の積み上げを全校で共通実践し、授業の中での目指す姿である「やる気をもって」「協働し」「変わり続けながら」納得解を見つけ、教科のねらいを達成するような授業改善の取組を行う。

以上の２つの取組の中で、「タブレット端末の活用」や「学びの振り返り」、「情報活用能力」を学年の発達段階に応じて積み上げることで、私たちの目指す「協働し、変わり続ける子ども」に近づくと考える。

本年度は特に、「情報活用能力を軸としたカリキュラム・マネジメント」に焦点をあて、研究を進めてきた。以下、その研究について述べたい。

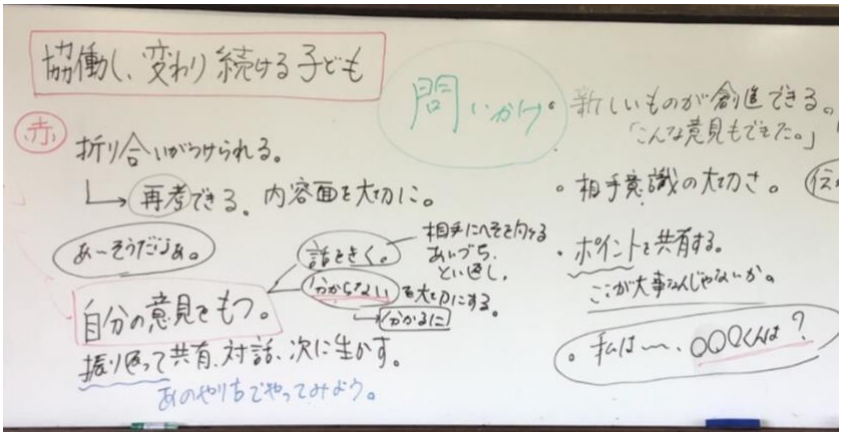
５　研究の実際

（１）年間のゴールを具体的に共有する

①学校全体で目指す児童像の共有

カリキュラム・マネジメントを進める上で、まずポイントなるのは、「目指す児童像」を具体的に共有することである。本校では研究のテーマにもなっている「協働し、変わり続ける子ども」である。この「協働し、変わり続ける子ども」は、教育に携わる者であれば何となくイメージできる児童像ではないだろうか。だが、イメージできている児童像は、それぞれの経験や教育観によって異なる部分も多い。

そこで、本校では毎年４月に旧職員、新職員全員で、「協働し、変わり続ける子ども」とは、どんな子どものことなのか、自由に意見を出し合い、その中から具体的なイメージを共有するようにしている。図２は、本年度のその話し合いの際の板書である。この話し合いをすることで、「協働し、変わり続ける子ども」とはどんな子どもなのか、具体的な児童の姿として共有することができ、職員のイメージを同じ方向に揃えて、カリキュラム・マネジメントに取り組むことができている。



【図２目指す児童像の共有】

しかし、一度共有するだけでは十分ではない。公開授業の後の授業研究会など、具体的な児童の姿を共有できる機会を捉えて、目指す児童像について共有を図るようにしている。

②総合的な学習の時間、生活科の年間のゴールの具体的な共有

総合的な学習の時間と生活科の各学年のゴールの姿を共有する。年度初めに一年間の学習の目的や流れは確かめるが、具体的なゴールの姿の共有は、児童の実態や学習の様子を把握した夏休みに行った。

まず、一年間の活動のゴールとして、どのような単元、どのような活動を行うのか、具体的な姿を話し合った。その結果は以下の通りである。

○１，２年（生活科）
→「できるようになったこと発表会」：各個人で保護者の前で発表（実演、プレゼン）する。
○３年（総合的な学習の時間「くまもとタイム」）
→「上通商店街の魅力を発信しよう」：グループで調べたことをまとめ、商店街の人にプレゼン発表する。
○４，５，６年（総合的な学習の時間「けんこうタイム」）
→「第２回すこやかサミット」：グループで調べたことをまとめ、保護者、地域の人、児童にプレゼン発表する。

具体的なゴールの姿が決まったら、そのゴールの姿を達成するためには、どんな力が必要かイメージマップを使って考えた（図３）。「インタビューする力」「伝えたいことに合った資料を選ぶ力」「相手に伝わるように話す力」等、多くの力が必要であることが分かった。

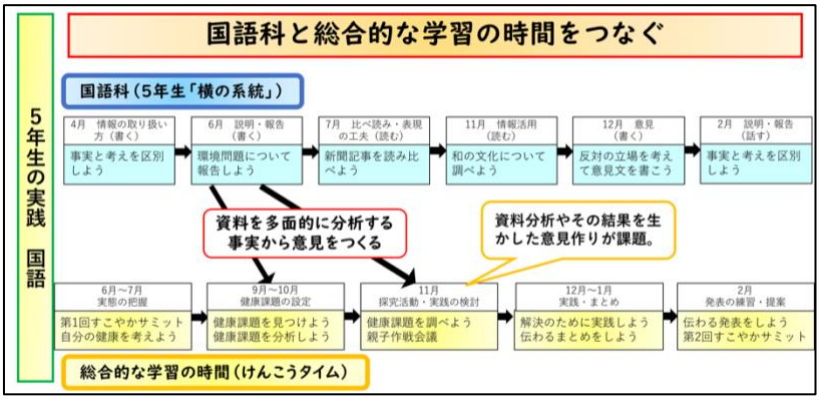
しかし、全ての学年で、それを全部身に付けさせることはできない。そこで、国語科の情報活用能力に関する単元の年間計画を用いて、その必要な力をどの学年で身に付けるとよいのかを整理した。そうすることで、４年生と５年生では、ゴールの活動は同じだが、学んだ情報活用能力に応じたプレゼンはどのようなものか、具体的に確かめることができた。

【図３総合的な学習の時間のイメージマップ】

（２）国語科と総合的な学習の時間、生活科を情報活用能力を軸につなぐ

国語科での学びを総合的な学習の時間や生活科につなげることの必要性は明らかになったが、それをどうつなぐのか計画しておかなければ、児童に力を積み上げることも、授業改善を図ることもできない。そこで、国語科と総合的な学習の時間、生活科を情報活用能力を軸につなぐ表を作成した（図４）。この表を作ったことで、総合的な学習の時間にどんな情報活用能力が必要かを具体的に考え、国語科の授業をどのように行えば、総合的な学習の時間に生かすことができるのかということも考えることができた。

つまり情報活用能力を軸につないだことで、総合的な学習の時間と生活科の授業、国語科の授業が変わった。以下に、各学年の国語科での実践を中心に具体的に述べていきたい。



【図４国語科と総合的な学習の時間をつないだ表】

（３）各学年の実践

① ５年国語「環境問題に目を向けよう」での実践

総合的な学習の時間「けんこうタイム」において、児童は自身の健康課題を設定し、その健康課題の解決のために学習を進めていく。その学習過程の中で、必要な資料を見つけ、分析し、自分の考えを明確にしていく過程があるのだが、その学習に課題があると感じていた。それは、課題解決につながる資料を見つけることができない。見つけることができても適切に分析できない。そして、その分析と関連付けて自分の考えを作ることができないということである。教師がそれぞれのグループに入り、話しながら児童の思考を整理し進めることで、何とか進めることができてはいるが、その方法では、児童に確かな力をつけることは難しいと感じていた。

そこで、国語科「書くこと」領域（６月単元）の「環境問題について報告しよう」での学びを生かすことを考えた。本単元はまず、自然や環境の問題について、調べるテーマを決め、本やインタ

ーネットを使って資料を集める。次に、その資料から分かったことを情報カードに整理して、その情報カードの内容をもとに自分の考えを明確にし構成メモにまとめて、意見文を書くことを目的としている。つまり、総合的な学習の時間での必要な資料を見つけ、分析し、自分の考えを明確にする学習に、この国語科での学びを生かすことができるのである。

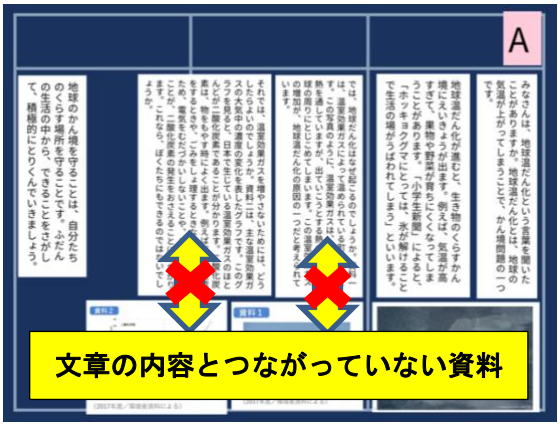
しかし、従来通りに学習を展開しても、児童に学びを生かす確かな力をつけることは難しいので、「①目的意識の明確化、②モデルの提示と単元の見通し、③児童の思考に合わせた段階的な思考ツールの活用、④振り返りによる学び方の実感」の４点で授業改善に取り組んだ。

ア　目的意識の明確化（単元のゴールの児童との共有）

まずは、環境問題について、児童に関心を持たせなければならない。７月に実施予定の水俣学習と関連付けて環境問題について関心を高めたいと考えた。そこで、水俣学習と並行して、世界で起きている環境問題について動画を視聴したり、ＨＰを閲覧したりする時間を設定した。児童に提示した内容は「地球温暖化」「食品ロス」「海を守る」「再生可能エネルギー」「陸の豊かさを守る」の５つである。児童は動画を視聴したり、ＨＰを閲覧したりする中で、少しずつ関心を高めることができた。そこで、どのテーマが一番気になったのか、その理由も含めて児童同士が交流する時間を設定した。その交流を通して、学級全体の意見として「人間のせいで環境が悪くなっている。変わらなければならない。」にまとまった。そこで「５－１環境サミットを開いて、環境を守る取り組みをしよう」という単元のゴールを児童とともに設定し、目的を明確にすることができた。

イ　モデルの提示と単元の見通し

児童に単元の学びの見通しを持たせるために、教師作成の意見文モデルを３つ提示した。その３つを比較し、どのモデルがよいのか、その理由は何かを考える学習を行った。一つ目は、資料と文章の内容がつながっていないバッドモデル（図５）、二つ目は、文章の中に意見や分析した事実がないバッドモデル、そして三つ目は、教科書の例文であるグッドモデルである。



【図５意見文バッドモデルの例】

しかし、授業を行ってみると、教師の意図通りに児童にそれぞれのモデルの違いに目を向けさせ、理由を話し合うことを十分に行うことができなかった。その原因は、３つのモデルの違いが明確でなく児童が違いに気付きにくかったこと、文章が長く読み取るのに時間がかかってしまったことが考えられた。児童の実態と授業のねらいに合った資料を準備することの大切さを改めて感じる機会となった。

しかし、いくつかの意見を取り上げまとめていく中で、授業の終わりには、相手に伝わるレポートを書くために「資料の説明から分かったこと（事実）から自分の考えを書く」という本単元での学びを確かめることができた。

ウ　児童の思考に合わせた段階的な思考ツールの活用

単元のゴール「５－１環境サミットを開いて、環境を守る取り組みをしよう」に向かって意見文を書くためには、まずは、資料を選ばなければならない。タブレット端末が導入されてから、Web 探索が容

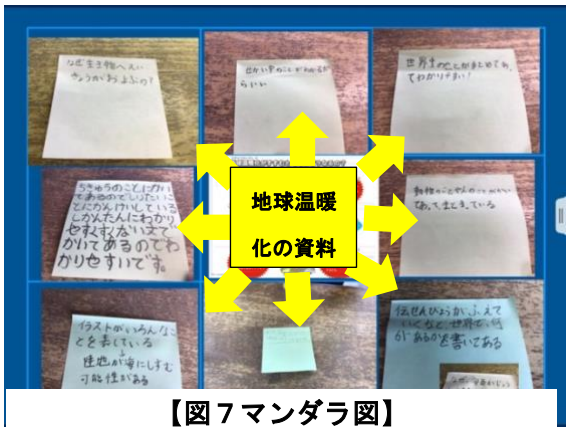
易になり、多くの資料を集めることができるようになった。しかし、その資料の中から本当に必要な資料を見つける力が必要である。つまり、自分が伝えたいこと（テーマ）を明確にもち、そのテーマを解決するのに役立つ資料を選ぶ学習が必要だということである。

そこで、思考ツール「ピラミッドチャート」を活用した。ピラミッドチャートはその目的に合わせて、いろいろな使い方ができるツールであるが、今回は、「伝えたいこと（テーマ）」とそれを伝えるための根拠となる資料を選ぶために使った。

【図６ピラミッドチャート】

ピラミッドの頂点（最上段）に動画視聴やWeb閲覧で考えた「伝えたいこと」のカードを入れる。そして、最下段には自分で見つけた使えそうな資料を入れる。そして、伝えたいことカードの内容に合った資料を選び、２段目に上げるのである。簡単な使い方だが、その資料を選ぶ根拠や理由が求められ、本人の考えが深まっていく。

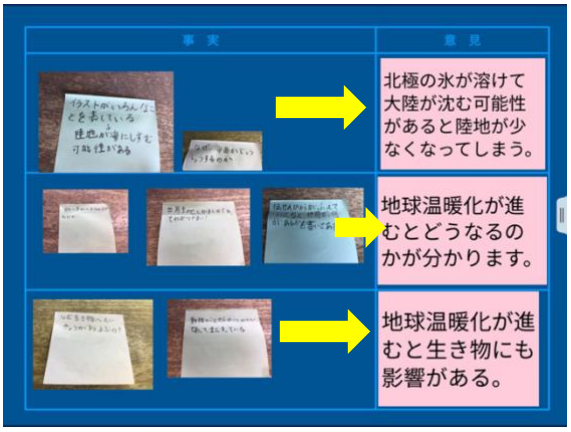
次に、その選んだ資料を分析しなければならない。そこで、思考ツール「マンダラ図（図７）」を活用した。「マンダラ図」は、分析したい資料を真ん中に置き、グループで話し合いながら気づいたことや分かったことを付箋に記入し、周りに配置していく。そうすることで、一人では気付かなかったことに気付くことができ、対話を通して資料の多面的な分析をすることができた。



【図７マンダラ図】

そして、分析した事実から自分の考えを明確にしなければならない。ピラミッドチャートで伝えたいことに合った資料を選び、その資料をマンダラ図で対話を通して分析する中で、児童の中で意見は作られてきているのだが、それをアウトプットしようとする時に、具体的な言葉にするのが難しい。児童は、多くの場合、これは事実なのか、それとも意見なのかという思考をすることはないからだと考える。

そこで、思考ツール「事実・意見シート（図８）」を活用した。マンダラ図で分析したカードを観点別に分け「事実」に入れる。その観点別に分けられた「事実」カードから考えたことを「意見」として色の違うカードにまとめていった。資料から分析した事実とそこから考えた意見を明確に分けてカードに書くことで、児童は分析した事実から自分の考えを持つことができた。

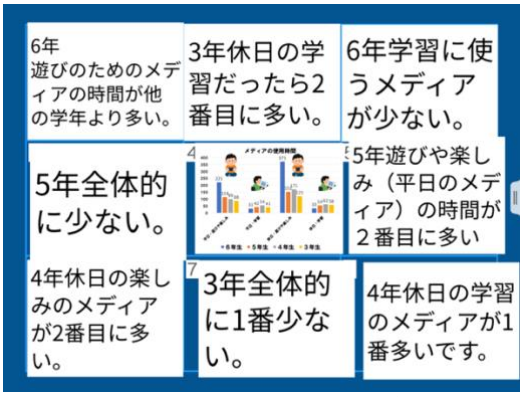


【図８事実・意見シート】

このように、児童の思考に合わせ段階的に思考ツールを活用したことで、多くの児童が資料の選択・分析、意見づくりを自分の力で進めることができた。

エ　振り返りによる学び方の実感

実際に総合的な学習の時間では、課題づくりの際に、児童が自らとったアンケートの結果をマンダラ図（図９）を使って分析し、事実・意見カードを使って考えをまとめる姿が見られた。国語で学んだことを総合的な学習の時間に生かすことができた。



【図９総合で活用したマンダラ図】

それは、児童に「何をどのように学んだのか、実感をもたせる」ことができたからであると考える。本校では、以前より振り返り活動に取り組んでいるが、今回は、特に学び方の実感に重点を置いて取り組んだ。授業の導入で紹介する児童の振り返りで、学び方について書かれているものを意図的に多く紹介した。また、最後の環境サミットで、児童それぞれが書いたレポートに対する感想も交流し、レポートを書いたことの価値付けも行うことができた。

総合的な学習の時間に資料を分析し、その分析をもとに自分の考えを持つために、国語科で児童の思考を段階的に整理して学習するなど授業改善できたことで、国語科での学びを総合的な学習の時間に生かすことができた。

② ３年国語「ほけんだよりを読みくらべよう」での実践

３年生は、総合的な学習の時間「くまもとタイム」で、故郷「熊本」、特に「上通商店街の魅力」について学習をする。生活科での地域学習の学びを生かしつつ、上通商店街の商店主や商店街を支える地域の人に着目し、各店の工夫を探っていくのである。

そのまとめとして、各店の工夫について調べたことやインタビューをして聞き取ったことから「お店の工夫ポスター」を作成する。そしてそのポスターを店頭に掲示させていただくことで、上通の魅力を発信することを目指している。だからこそ、作成するポスターは、各店の魅力が伝わるものでなければならないし、その内容に一番合う資料が添付されていなければならない。

しかし、児童の実態を振り返ってみると、新聞等を書く際に「伝えたいこと」につながる内容、資料になっていないことがある。それは、主張とそれを支える理由・根拠を考える学習や、伝えたいことに合った資料を選ぶ学習の経験が少ないことが理由として考えられる。だからこそ、伝えたいこと（主張）とそれを支える理由・根拠を考える学習が重要である。また、伝えたいことに合った図表やアドバイスを選択する力を身に付けなければならない。

そこで、国語科「読むこと」領域（６月単元）「ほけんだよりを読みくらべよう」での学びを生かすことを考えた。本単元は、２つの「ほけんだより」を読み比べることで、主張を伝えるための書き手の工夫（事柄の取り上げ方や図や表の使い方等）を読み取ることをねらいとしている。

次のような構想で、授業を展開した。

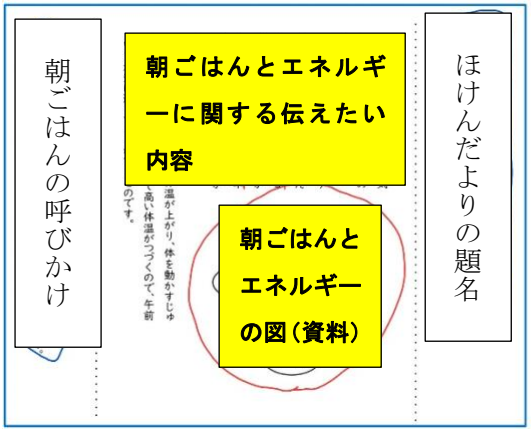
１、教材文をもとに、本校養護教諭が作った２つの「ほけんだより」を違いに着目して読み比べ、伝えたいことの違いや、その違いに応じて図表やアドバイスが選ばれていることを学ぶ。
２、これらの学習を生かして、実際に学級の友だちと話し合い、本校の「ほけんだより」として「よりよいものはどちらか」を選ぶ。
３、その選ばれた「ほけんだより」が実際に全校に向けて配布される。

このような学習をすることで、国語科での学びを総合的な学習の時間でのポスター作成で、伝えたいこと（主張）とそれを支える理由・根拠を考える学習や伝えたいことに合った図表やアドバイスを選択す

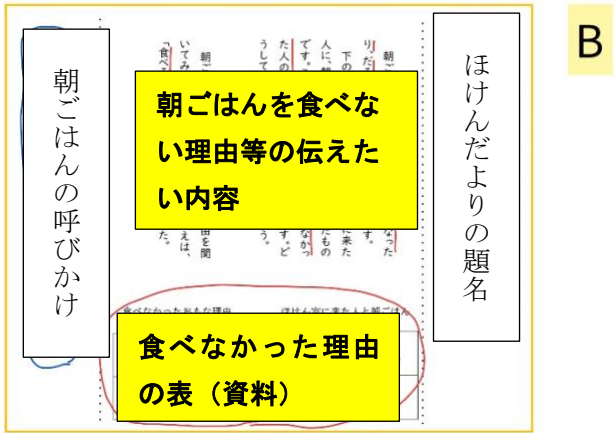
ることに、生かすことができると考えた。そこで、「①相手意識・目的意識の明確化、②目的にあった図表の選択、③アドバイスの効果」の３つの視点で授業改善に取り組んだ。

ア　相手意識・目的意識の明確化

２つの資料（図１０、図１１）を提示し、「どちらの保健便りがいいと思う？」と児童に問いかけると、比較しているので、はじめはやる気がアップするであろう。しかし、そのやる気はあまり長続きしない。



【図１０　Ａのほけんだより】



【図１１　Ｂのほけんだより】

やはり児童にとって、やらされる課題では、主体的に学ぶ力を身に付けることは難しい。そこで、今回は、本校養護教諭と連携し、児童が主体的に取り組むための手立てを考えた。一つ目は、実際に児童が選んだ「ほけんだより」を全校に向けて配布すること。二つ目は、「どちらにするか迷っているので、アドバイスをしてほしい。」と、養護教諭からメッセージ動画で、３年生に向けて依頼すること。その内容は以下の通りである。

「城東小のみんな（相手）」に「朝ごはんをしっかり食べてもらうために（目的）」は、どちらの「ほけんだより」がいいか、悩んでいます。３年生の力を貸してください。

メッセージ動画を観た児童は、身近な存在である保健室の先生からのメッセージということで、やる気がグンと高まり、自分事として捉えることができた。児童の振り返りを紹介する。

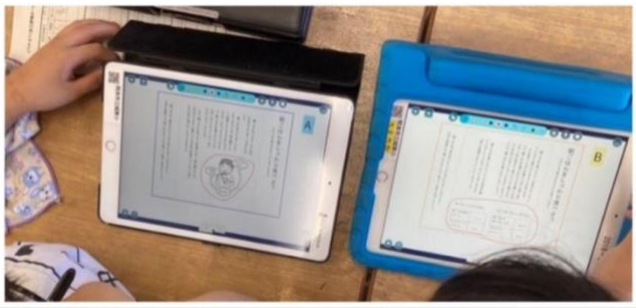
今はＢがいいと思っているけど、もうちょっとくわしく考えて、どっちがいいか坂本先生に教えていきたいです。

また、誰に向けた、何のために出す「ほけんだより」なのかという相手意識・目的意識も明確に持つこともできた。実際に、総合的な学習の時間にポスターを書くには、相手意識・目的意識を明確に持つ、つまり伝えたいこと（主張）は何なのかをしっかりと持つ必要がある。この学びを生かし、誰に向けた、何のためのものなのか、という視点をもってポスターを書いていけるようにしたい。

イ　目的に合った図表の選択

まず、どちらの「ほけんだより」も、「全校児童に向けて、朝ごはんをしっかり食べてほしい。」という目的で書かれていることを読み取った。すると、２つの文章を読み比べる中で、「相手や目的は同じなのに、内容や資料が違うのはなぜなのか？」と違いに気づくことができた。そこで、「どうしてＡのほけんだよりは図が使われていて、Ｂのほけんだよりには表が使われているのだろう。」と資料の違いから、書き手の意図に迫る学習を行った。

ペアになり、それぞれのタブレットに、A、Bの資料を表示し、２つの文章を読み比べることができるようにした（図１２）。まず、資料がそれぞれ違うことを確認した上で、それぞれの資料の説明が書かれている文にサイドラインを引いた。そして、「どうしてAのほけんだよりは図が使われていて、Bのほけんだよりには表が使われているのだろう。」と発問した。



【図１２　２人に２台のタブレット端末で比較する】

児童は、下記の発言に見られるように資料と文章の内容のつながりに着目し、それぞれの文章が伝えたいこととその意図に気付くことができた。伝えたいこと（文章の内容）と根拠（資料）のつながりに気付くことができた。

【発言１】Aのほけんだより（前頁　図１０）は、「朝ご飯はエネルギーになったり、体温があがることにつながったりしている。そのことがすぐ見て分かるように、図が使われている。」
【発言２】Bのほけんだより（前頁　図１１）は、「朝ご飯を食べないと、元気がなくなったり、だるさを感じたりする。その人がどれくらいいるかを伝えるために、数値を入れた表が使われている。」

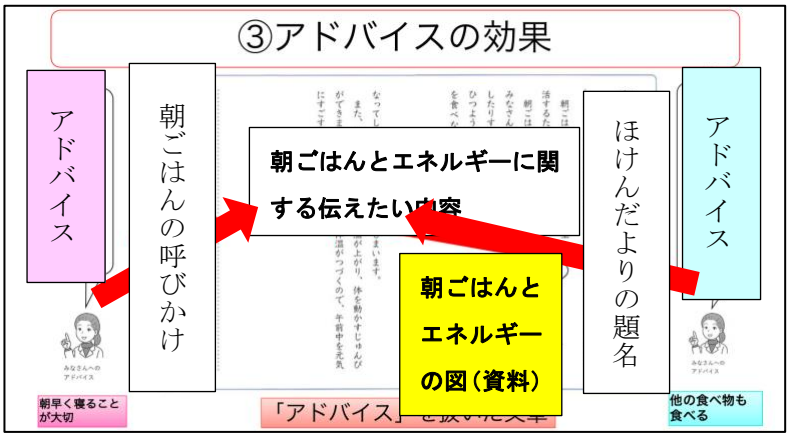
ウ　アドバイスの効果

ポスターも保健便りも、読み手に行動の変化を促すという目的がある。例えば、ポスターであればイベントに参加してもらう、保健便りであれば早寝早起きをする等である。そのために書き手は、読み手の興味を引くキャッチコピーを考えたり、資料を載せたりする。そして、読み手の具体的な行動を促すための言葉も欠かせない。今回の「ほけんだより」でも、読み手の具体的な行動を促すアドバイスとして、次のような言葉が教材文に示されている。

Ａ：朝ごはんには、ごはんやパンだけでなく、ほかの食べ物もいっしょに食べるとよいですね。
Ｂ：朝ごはんをしっかり食べるには、前の日の夜に、早くねることも大切ですね。

しかし、このアドバイスを初めから本文に載せて提示しても、児童はそのよさや効果、書き手の意図に気づきにくい。そこで、単元の初めから「アドバイスを抜いたほけんだより」を使って授業を進めることにした。そして、伝えたいことやそれを支える資料の関係を読み取った後に、１つの本文に対して、２つのアドバイスを提示し、どちらのアドバイスが本文の内容に合っているかを考えた。このように、アドバイスに着目して授業を行うことで、アドバイスのよさや効果、書き手の意図に気づけるのではないかと考えた。

まず、養護教諭からのメッセージ「Aのほけんだよりに入れたいアドバイスを２つ考えました。どちらがいいのか、３年生の力を貸してください。」を伝えた。次に「２つのうち、どちらのアドバイスがよいか考えよう」と、めあてを確認した。児童は、本文の内容と２つのアドバイスを読み比べ、考えを出し合う中で、「Aの文と①の文は、どちらも食べるといいということを伝えたいんだと思う。」等、それぞれのアドバイスが伝えたい



【図１３アドバイスの効果】

ことに気付くことができた（前頁　図１３）。最後に、アドバイスがない本文と、ある本文を比べることで、アドバイスと本文のつながりやアドバイスの効果についても気付くことができた。

単元の最後には、養護教諭に「Aの方が、城東小のみんなに合っているし、よく伝わると思います。」と学習の結果を伝えることができた。そして、実際に全校児童に向けて３年生が選んだ「ほけんだより」が配布されると、達成感を味わうことができた。児童の感想は以下の通りである。

自分たちでがんばった「ほけんだより」がさいようされて、がんばった結果みたいで、うれしかった。お母さんも「すごいね。」と言ってくれて、よかった。

「ほけんだよりを読みくらべよう」の学習を通して、児童は、伝えたいこと（主張）とそれを支える理由・根拠を考える学習や伝えたいことに合った図表やアドバイスを選択することを学び、読み手に伝えたいことをしっかりと伝えるために、書き手は様々な工夫をしていることに気付くことができた。

総合的な学習の時間のポスター作りで生かすことを意識しながら国語科の授業づくりをしたことで、児童が相手・目的意識を持ち主体的に学ぶ課題提示の工夫など、授業改善を図ることができた。実際に、総合的な学習の時間にポスターを作る際にも、上通商店街の方々の思いや願いを知ることや、思考を整理するためのツールの活用など、児童が、相手意識や目的意識を明確に持ち、伝えたいことにつながる図表やアドバイスの選択ができるように、これからも実践を重ねていきたい。

③ ２年国語「あそび方を説明しよう」での実践

国語科と生活科の学習系統を見てみると、国語科の「観察したことを書こう」と生活科「大きくなれ！私の野菜」、国語科「あそび方をせつ明しよう」と生活科「うごく動く私のおもちゃ」など、学習内容が関連している単元が多くある。しかし、内容面でのつながりはあっても国語科で身に付けた力を、生活科で活用できるかというと、そうではないことが多い。これは、児童も教師自身も国語科での学びを生活科で生かそうとする意識が低く、国語科の学びと生活科の学習とをつなげることができていなかったためだと考えられる。

そこで本実践では、学びを生かしている姿とは、具体的にはどのような姿かを明らかにし、国語科と生活科のつながりを意識することから授業づくりを行った。

「書くこと」領域（１１月単元）「あそび方をせつ明しよう」の学習を通して、情報の収集と取捨選択する力、説明の順序やつなぎ方を考えて分かりやすい文を書く力を育む。これらの情報活用能力を生かして、生活科「うごく動く私のおもちゃ」では、自分が作ったおもちゃの遊び方を１年生に分かりやすく工夫して説明する。この姿が、本実践での児童が学びを生かしている姿と考えた。

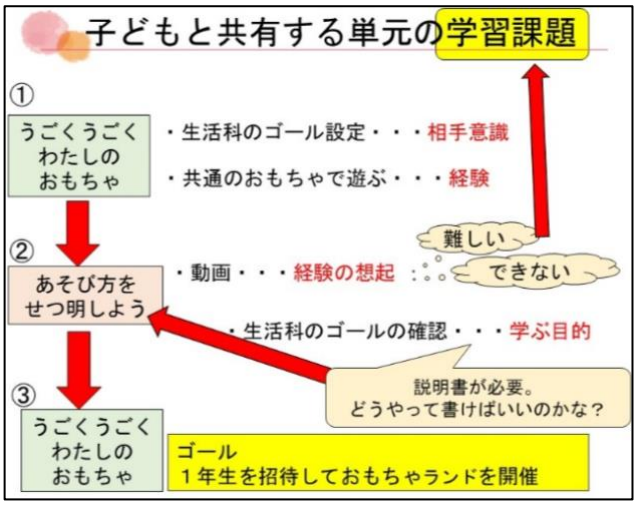
そこで、児童が国語科の学びと生活科の学習とのつながりを意識して学習に取り組んでいけるように「①国語科と生活科をつなぐ単元構成、②モデル文の提示と思考ツールの活用、③動画の活用と実演での確認、④振り返りによる学びの価値付け」の４点で授業改善に取り組んだ。

ア　国語科と生活科をつなぐ単元構成

児童自身に、「説明を書く方法」を学ぶことに対して必要感を持たせることが大切である。そこで、「あそび方を説明しよう」の学習に入る前に生活科の学習を行った。生活科で、使い方を知らない初めてのおもちゃで思いきり遊ぶ中で、「どうすればいいのかな。」「遊び方が難しい。」「できない。」と少し困る経験をする。その経験が説明を書くことへの必要感へとつながっていくのである。生活科では「１年生を招待しておもちゃランドを開催する」というゴールを設定し、そのために必要な

準備は何かを一人一人考えた。それにより、児童は「何のために遊び方説明の学習をするのか」という目的意識を持つことができた（図１４）。

その学習を生かして、国語科「あそび方をせつ明しよう」の学習では「自分たちが作ったおもちゃで１年生に楽しく遊んでもらえるよう、分かりやすい説明ができるようになる」という学習課題を児童とともに設定した。単元を学習する際にも、ペアで情報の分類や整理、順序の並べ替えを検討する時には、生活科で活動している動画を見て経験を想起するなど、国語科と行き来しながら学習した。そのことにより、児童は目的意識を持ち続けながら主体的に学習に取り組むことができた。

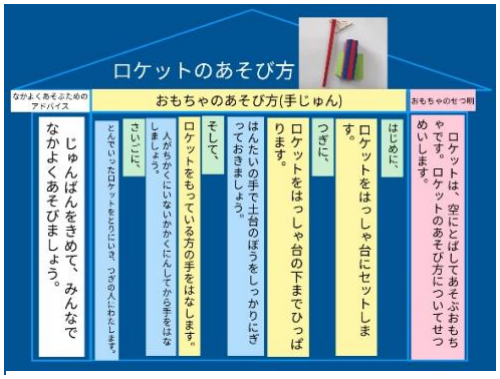


【図１４国語と生活科の単元構成】

イ　思考ツールの活用（家チャート・２分割図）

「はじめ・中・終わり」のまとまりを意識して書くことができるように、思考ツール「家チャート」を活用した。家チャートは、文章全体の構成が見やすいチャートである。

まず、家チャートを使って書いた教師のモデル文（図１５）を示し、モデル文の説明通りにすれば、本当におもちゃで遊ぶことができるのか確かめた。そこで、実際に遊ぶために、「はじめ・中・終わり」のまとまりに、どのような内容が書いてあるかを出し合い、どんな説明を書く必要があるのかを確認した。

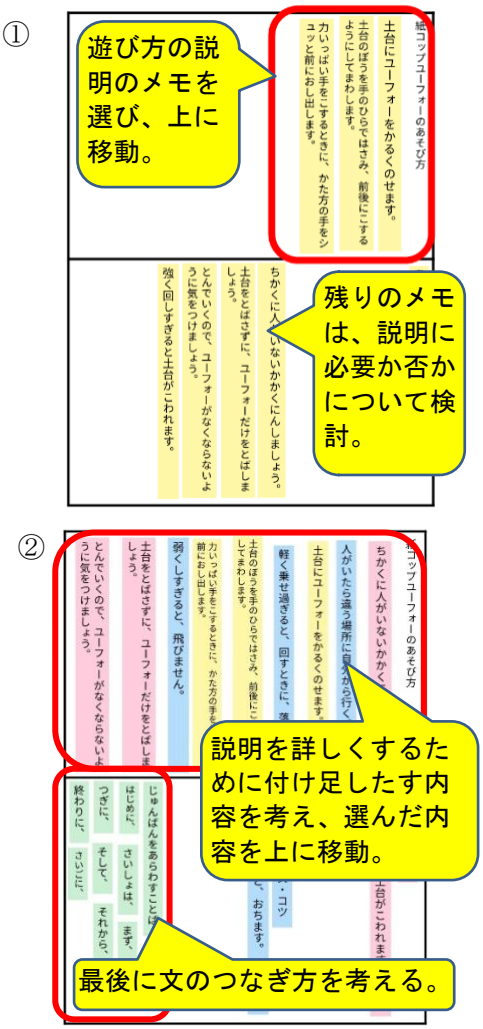


【図１５家チャートを使ったモデル文】

「はじめ・中・終わり」のまとまりを意識できるようにしたことで、遊びの説明を考える際に書くべき内容が絞られ、書く学習に取り組み始める時や、ペア学習で説明の仕方を確認し合う時（図１６）などにスムーズに学習に取り組んでいくことができた。

【図１６対話の様子】

中の文章を書く際には、２分割図（次頁　図１７）を用いた。２分割図は、上下に分かれており、下から上にカードを動かすことで、集めた情報を分類・整理することがとても簡単にできる。また、タブレット端末のアプリを使えば、カードの色を変えることもできるため、「はじめ・中・終わり」のまとまりや説明の内容ごとに色で分類・整理することもできる。



【図１７思考の変化による２分割図の変化】

実際の児童の思考の変化による２分割図の変化は次の通りである。

まず、遊び方の説明に必要な事柄を選び上に移動させる。残りのメモの内容は必要か否かを検討し、遊び方以外で必要なコツやアドバイスカードは色を変えて残す（図１７①）。

次に、自分の考えた文章は正確に伝わるか、説明の順序はよいか等を検討するために、自分で考えた文章通りにペアの相手に実演してもらったり、動画を見直したりする。そして、そこでの気付きを出し合い、より詳しく伝えるための付け足しの文を考えたり、順序の入れ替えを行ったりする（図１７②）。

このように、２分割図は、集めた情報を分類して整理したり、順序を入れ替えたりすることがとても簡単にできる。そのことが、友だちとの対話を活性化し、個々の考えを深めることにつながった。

ウ　動画の活用と実演での確認

語彙量が少ないため、２年生にとって遊び方を説明する文章を書くことは、とても難しい。そのため、具体的な資料を活用することが必要である。そこで、遊び方の説明に必要な事柄を集めるために、実際に児童がおもちゃで遊んでいる様子を撮影した動画を用いた。また、自らよりよい文章にする推敲の必要性を感じてほしいと考え、文の構成を行う際には、ペアで実演での確認をする時間を設定した。

事柄を集める際に使用する動画は、考えさせたい部分が明確になるように、音や背景など余計な情報を極力省き、短くまとめた。動画を使用することで、自分の経験を確認しながら、必要に応じてゆっくり再生したり、繰り返し見たりして遊び方を説明するのに必要な事柄を集めることができた（図１８）。

【図１８動画で事柄を収集する様子】

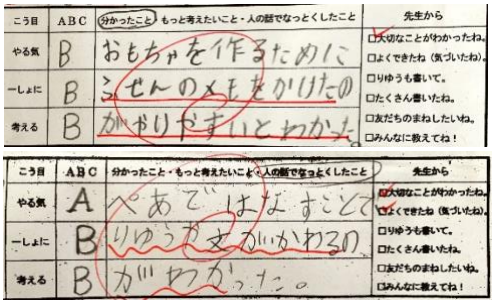
そして、文の構成を行う際に、実演での確認や動画の活用を取り入れたことで、国語科で書いた文章をもとに、生活科で実演（図１９）して説明書通りに行うと本当に遊ぶことができるか確認することができた。また、生活科で撮影した動画を国語科の時間に確認して、足りない説明を加えたり、順序の入れ替えを検討し直したりすることもできた。

つまり、児童が自ら実演や動画で確認したことで，推敲の必要性を実感することができたのである。教師から文章の見直しをするように声をかけなくても，足りない説明を加えたり、順序を再び検討し直したりすることを、自ら繰り返し、さらに相手に伝わる説明にしていくことができた。

【図１９実演して確認する様子】

エ　振り返りによる学びの価値付け

国語科で学んだ力を生活科、そして普段の生活に生かすことができなければならない。そのためには、まず、児童に１時間の中で何を学んだのかを自覚させることが大切である。そこで、「今日は、情報を集めることについての振り返りをしましょう。」や「情報を選ぶについて振り返りをしましょう。」のように１時間ごとに振り返りの視点を絞って、何が分かったか、何ができるようになったかを記述していくようにした。さらに、視点に沿って書けている児童の振り返りを全体に知らせた。それを繰り返し、振り返りの視点とつながる考えや気付きを価値付けすることで、何を学んだのかが少しずつ意識できるようになった（図２０）。



【図２０児童の振り返り】

【図２１おもちゃランドで説明】

そして、この国語の学習を生かし、生活科で「１年生を招待しておもちゃランドを開催する」ための説明書を作成し、実際にその説明書を使って遊び方を説明し、１年生におもちゃランドで楽しんでもらうことができた（図２１）。

おもちゃランドの後は、「しっかり楽しんで遊んでくれてうれしかった。」といった満足感を得るとともに、「もっと話す練習をすればよかった。」と、相手に伝えるためには、もっとよい説明ができるようになりたいという思いも持つことができた。さらに、メモに必要なことを書き出したり、順序を並び替えたりと、生活科や学習以外の場面でも「情報を集める→比べる→絞る→並べる」という方法を使って、伝えたいことをまとめていこうとする姿が見られるようになった。児童が、他教科や生活で学びを生かすために、動画や実演を活用して学びを振り返る等の授業改善を図ることができた。

６　おわりに

（１）成果

【仮説】情報活用能力を軸としたカリキュラム・マネジメントに取り組むことで、「協働し、変わり続ける」子どもを育成することができるであろう。

本年度は、昨年度までの研究の取組を継続しながら、特に「情報活用能力を軸としたカリキュラム・マネジメント」に焦点をあて、研究の質的な高まりを目指してきた。具体的な取組は、

①目指す児童像「協働し、変わり続ける子ども」の具体的な姿を話し合って共有したこと。

②総合的な学習の時間、生活科の各学年のゴールの姿を出し合って具体的にイメージしたこと。

③国語と総合的な学習の時間、生活科を情報活用能力を軸につなぐカリキュラム・マネジメント。

④総合的な学習の時間や生活科で学びを生かすことを意識した国語科授業の改善。

の４つである。全職員で共有することを大切に、このような取組をしたことで、国語科での学びを総合的な学習の時間や生活科で生かそうとする児童が増えた。情報活用能力を軸に学びをつなごうとする、積み上げようとする教師の意識が高まった。

【視点１】国語科と総合的な学習の時間、生活科をつなぐ情報活用能力の明確化

児童（３年生以上）に、「総合的な学習の時間に、国語の授業で勉強したことを使って、調べたり、まとめたり、発表したりしたことがありますか。」という質問をしたところ、図２２のような結果となった。約９０％の児童が、国語科での学びを総合的な学習の時間や他の教科、生活の中で実際に使っていることが分かる。それは、職員へのアンケート結果（図２３）からも分かるように、まずは私たち教師の意識の変化、授業への取り組み方の変化が一番の要因であると考えた。学んだことを生かそうとすると、その学び自体をより確実なものにしていかなければならない。例えば、「主張とつながる資料の選択」、「図表の効果」等を学ぶにしても、そのことのよさや必要性に児童が気付き、具体的な方法を身に付けていくことが重要である。そのための授業改善ができたと言える。

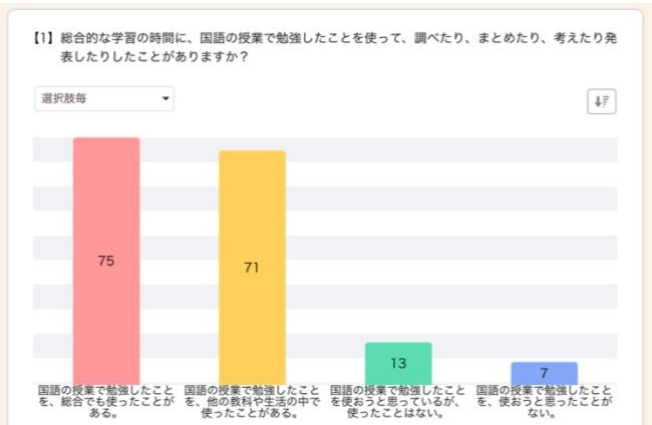


図２２児童へのアンケート結果

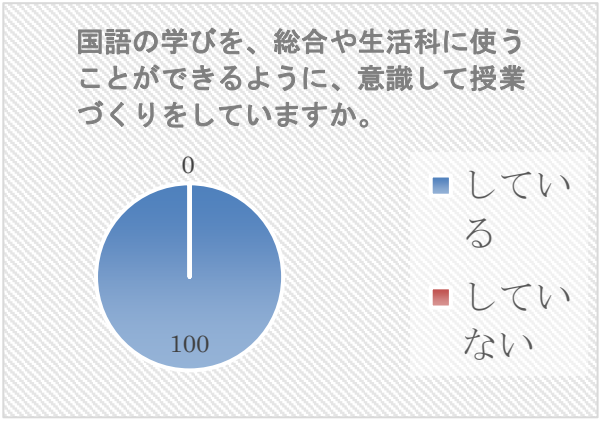


図２３職員へのアンケート結果

【視点２】国語科で学んだ情報活用能力を総合的な学習の時間、生活科で生かす授業づくり

では、どのようなことが具体的に授業改善できたのか。本校職員にアンケートを行ったところ、次のような回答があった。

○　教師が見通しを持って国語科と生活科のカリキュラム・マネジメントを行っていくことで、子どもたちは学んだことを意識して使いながら、次の学習ができた。発表力が向上した。

○　今までも「既習事項（学び）を生かす」授業を意識して実践を重ねてきたが、十分ではなかったと実感している。「学んだことは何だったかなあ。」と既習事項を思い出すことが主で、「学ぶ（既習する）」段階で、「この学びをどのように生かすか」を明確に考えていなかったからだと思う。「どのように生かすのか」からスタートすることで、「どのように学ぶとよいのか」を考える。この授業づくりの意識の変化が、私にとっての授業改善だと思う。

○　国語で、伝える相手を多岐に設定し、相手に伝えるための工夫を考えポスターを作製した。そのことが、総合で１年生から５年生にその学年のよかったところと課題を伝える時に、大変役立った。また、総合や国語の学習を繰り返すうちに相手意識を持つこと、何を伝えたいのかをはっきりさせることが必要なことを意識して取り組めるようになった。

職員の回答にある「教師自身が見通しを持つこと、学びを生かすこと、相手意識を持つこと、伝えたいことの明確化」は、授業づくりにおいて重要だと言われてきたこと（不易）である。つまり、

不易を大切にしながら、以下の点において、授業改善できたと言える。

① 総合的な学習の時間や生活科で、学びをどのように生かすかを考えて、国語科の授業でどのように学ぶとよいのか、教師が見通しを持ち、児童に学んだことを使わせようと意識したこと。
② 児童が、伝えたいことや、相手意識を明確にできることの重要性に、教師が実践を通して気付き、総合的な学習の時間でも、生活科でも、国語科でもアウトプット型の授業に挑戦できたこと。
③ どの学年でも、縦の系統を意識した授業を行うことで、児童に学びを積み上げることができたこと。

（2）課題

児童の姿や教師の意識の中で、多くの成果が見られたが、課題もあった。

まず、教科を国語・総合的な学習の時間に絞って取り組んできたので、他教科に拡げる取組が必要だと考える。次に、研究の進め方について。全職員で共通理解したり共有したりすることを大切にしてきた。しかし、そのためには時間が必要である。その時間の確保や、より焦点化した研究の在り方を考えなければならない。そして、次年度につなげるために、本年度の研究・実践を振り返り、見直して、次年度の計画を立てること。これが最も大切である。本年度、試行錯誤してきた職員でなければ、次年度につながる計画を立てることはできない。この時間を確保し、詳細な計画を立てることこそが、研究を進めるエネルギーであると考える。

「協働し、変わり続ける子ども」の育成は、どこかにゴールがあるわけではない。予測困難な時代を自分の力で生きるためには、その研究も常に変わり続けなければならないだろう。「協働し、変わり続ける子ども」の育成を目指し、研究・実践を今後も積み上げていきたい。

６　引用文献・参考文献

１）前田康裕著『まんがで知る教師の学び３』さくら社　２０１８
２）前田康裕著『まんがで知る未来への学び』さくら社　２０１９
３）文部科学省『学習指導要領「生きる力」カリキュラム・マネジメント』
４）文部科学省『小学校学習指導要領（平成２９年度告知)』